
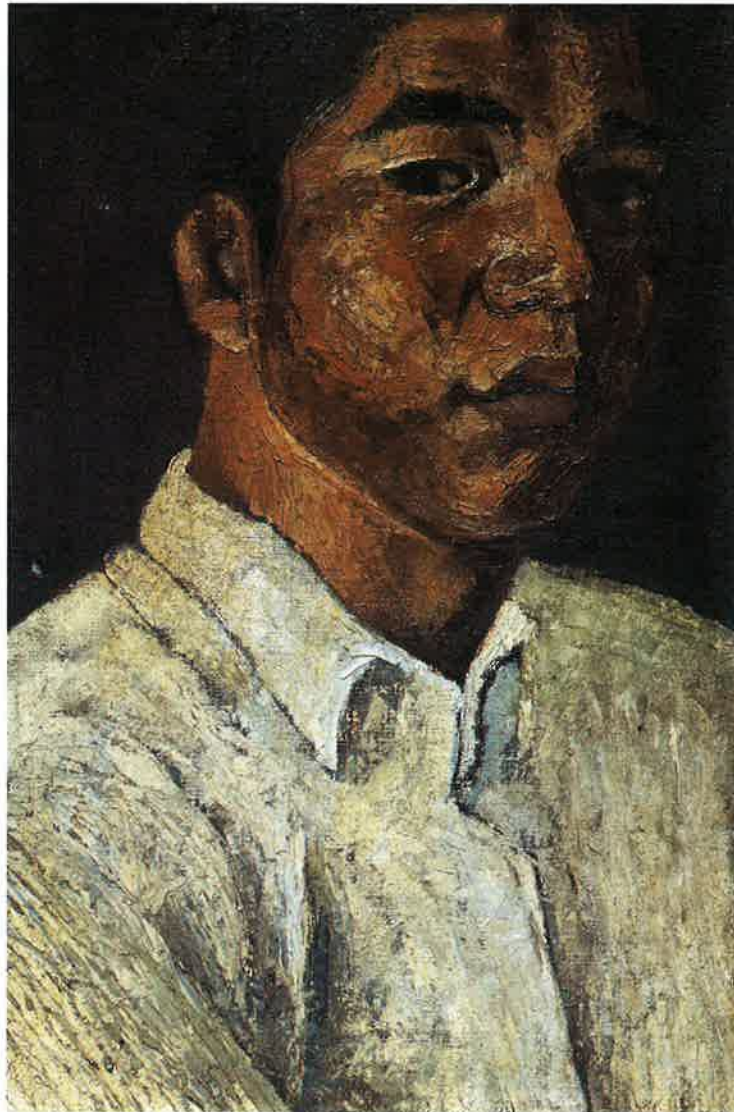


神田日勝記念館 だより

 神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL(01566)6-1555



自画像 1956年頃

Contents

- 2 『無意識の中で』小檜山博館長
神田日勝記念館の学校活用について
- 3 取材ノートⅠ
『葬送曲を流した喫茶店』
取材ノートⅡ
『神田日勝の幼なじみの人たち Part 2』
- 4 前期常設展『神田日勝の風景画く春から夏く』
山塊―熊代弘法油彩展
萬鉄五郎記念美術館所蔵作品展
刷り師―木村希八の仕事展
- 5 第八回 蕪 壱 祭
新出紀久雄と水彩画家の仲間達展
第十回 馬 耕 忌
ACT5展
- 6 寄稿文
『リアリスト神田日勝』 栃内 忠男
『日勝家での昼食』 霜村 英靖
- 7 親子写生会
親子ワークショップ
夏休み子どもワークショップ
感想ノートより
映画「女はバス停で服を着替えた」ロケ
- 8 馬の絵写生会
第八回馬の絵作品展
新販売物のお知らせ

2002.10.20

17

無意識の中で

館長 小曾山 博



絵というものについて何も知らないに等しいが、神田日勝と彼の絵が好きだという理由だけで記念館の仕事を手伝わせていただく無謀をお許しただきたいと思います。

ぼくも一応、小さいときから絵は好きで、四十歳ころにも水彩の絵を描いたりしましたが、もちろん趣味以下のできで、家族に見せるのも恥ずかしいほどでした。

ただ人さまの絵はよく見てきて、ここ十年くらいの間にもイタリアへ五回ほど行き、ウィフィツイ美術館のポッティチエリやミケランジェロ、またサンタ・マリア・デレ・グラツィエ教会のレオナルド・ダ・ビンチの絵、ボルゲーゼ美術館、バチカン美術館、スペインへ行きピカソやダリの絵も見歩いてきました。とくべつ何かを学ぼうという気持ちなどはなく、ただぼんやりと見流してきたわけですが、それでもたぶんぼくの無意識の中では何ごとか波立ちが起こっているに違いないと考えています。

たとえばフレンツェのラツファエロの絵は四回見ましたが、見るたびにそれまで気づかなかった

世界が広がるのを感じます。これも、ぼくの意識と無意識が時間とともに絶えず変化しているからでしょう。

神田日勝の絵も同様、見るたびに新しい世界がひそんでいることに気づくのですが、これもまた日勝の無意識の中にある生きざまが、絵を通してぼくの無意識の中へ移ってきて感動というかたちをとるのだらうと思っています。

このあと何年お世話になるかわかりませんが、日勝の絵を好きな一人として、見るたびに彼の絵の中にある人間の生きざまを感じとっていく幸せを味わいたいものと考えております。

研修会 「神田日勝記念館の学校活用」

四月二十三日・鹿追町民ホール

鹿追町内の小中学校の教務や図工担当の教員を対象に、神田日勝記念館をより有意義に活用し、実際の授業を計画する際に役立ててもらおう目的で、本年四月からの学校週五日制開始に伴い、研修会を実施しました。参加者は九名。前年の活用例と本年の活用計画の説明、続いて展示室での作品解説、さらに意見交換を行いました。「鑑賞や写生、馬の絵の描き方、利用のマナーを学習させたい」、「一般来館者には、学校の授業を行うことへの理解が欲しい」、「神田日勝についての公開授業をしたい」などの要望や意見が述べられました。

神田日勝記念館の学校活用

五月二十三日、社会科の施設見学のため、鹿追小学校三年生四十二名がロビーや展示室などの他、非公開の収蔵庫や研究室も見学、活発な質問が寄せられました。六月七日には、地域学習として、鹿追高校二年生五十八名が展示室での作品解説と映像で作家理解を深めました。七月五日には、地域学習として町内複式四校の三・四年生二十五名、九月五日には保育園児との交流学习として幼児八名と上幌内小学校の四名、九月二十四日には「町探検」として鹿追小学校二年生四名が、それぞれ来館しました。これらは総合学習や神田日勝を通じた郷土学習の一環として行われました。



取材ノートI

葬送曲を流した喫茶店



「その夜、帯広市内の某喫茶店では一晩中葬送曲が流れていた、と後になって聞いた。知らずに入ってきたお客さんは、さぞかし戸惑ったことだろう。」(「続・八月二十五日」「私の神田日勝」)
 一日勝逝去の夜葬送曲を流していた喫茶店はどこかという質問を受けた。

まず浮かんだのは茶房「琥珀」と喫茶「川」。早速広小路の「琥珀」を訪ねた。この店はかつて神田日勝の小品を常設展示していたことがあり、現在も「雪の農場」と「荒野の廃屋」の二点が壁面を飾っている。昭和四十三年鈴木正毅氏が「琥珀」の新しい店を現在地に開いた。最初は村元俊郎氏の作品を掛けていたが、一年後松本竹敏氏に神田日勝を紹介され、「部屋を部屋として見てもらいたいので、特に絵のための照明を当てることはしない」と話したが、日勝は承諾して七・八点の作品を展示してくれた。それ以後日勝は生前月に一、二度程度一人で来店したという。日勝作品の

常設展示は遺族に作品を返却するまで続いた。この経緯は荒井良夫氏の「失われた絵」(『山音文学』八四)に詳細に描かれている。ただ、葬送曲は流してはいないという返答をいただいた。

この話を小川原脩記念美術館の「麓彩展」の折に徳丸滋氏にしたところ、日勝が存命中と断った上で画廊喫茶「ウイーン」で葬送曲を流した記憶があると言う。そこで帯広市民文化ホールに千田時雄・慶子ご夫妻を訪ねた。夫人はレクイエムの一節を口づさみながら、この曲をかけたことはあるが、一晩中ではなく、日勝逝去の時でもないという。

そうになると、生前日勝の小品を松本竹敏氏を通じて入手したという高橋天岷氏の喫茶「モーラ」か。しかし高橋氏は既に故人。

さすがの思いで「川」を経営していた及川裕氏に電話。すると受話器の向こうから、「その夜、神田日勝が死んだ」と太田修教氏が血相を変えて店に飛び込んできた。そこで一晩中ではないが、フォールレとモーツアルトのレクイエムをかけた思い出がある」との返答。

僕の喫茶店捜しの旅は終わった。

(菅 訓章)



取材ノートII

神田日勝の

幼なじみの人たち

Part2



鈴木孝一氏

鈴木孝一氏は、日勝の一歳上で笹川小学校から鹿追中学校、そして青年団でも夏は釣りや登山、冬には演劇など、一緒にいろいろな活動をし、農閑期や雨の日にはよく日勝の家を訪ねるなど、長い交流がありました。

特に青年団活動では、演劇「山麓の人々」で、日勝が主演で父親役、鈴木氏が息子役を演じたそうです。この作品は「葦」という雑誌に掲載された台本を、笹川小学校教員の平間慶一氏が、当時鹿追に駐屯を始めた自衛隊と農民の問題をテーマに手直した脚本を作り、昭和三十三年十勝連合青年団主催の演劇発表会に鹿追代表として出場、脚本賞を受賞しました。秋から冬にかけて、昼間集まって練習し、笹川小学校の学芸会に参画したり、町内の連合青年団の演劇発表会に出演したりしたそうです。

また、4日クラブ(檜葉4日クラブ・笹川敬農青年団)で、優秀な農業経営を目指して日勝とともに頑張った日々の思い出や、晩年の日勝宅を訪ね、描きかけの「室内風景」の画のそばで世間話をしたことなどをなつかしそうに語ってくれました。そして、日勝の、農業者として生き、画家として生きた一生を、本当に理解することは難しいことだと話されました。(釜沢 恵子)

平成十四年度前期常設展 神田日勝の風景画〜春から夏〜

神田日勝が描いた風景画は、圧倒的に秋が多いのですが、それは絵を描くことと農業との両立をめぐした日勝にとつて、収穫の終わった時期は、絵を描くことに費やす時間が増えるという生活上の理由とともに、十勝の自然の典型的な姿をその季節に求めたからかもしれません。また、公募展出品作とは異なり、これらはいずれも小品で、画廊から依頼されたものや、新築や結婚祝いに請われて描いたものなどが大半でした。

春から夏の風景には、十勝の農村風景を描いたものと、帯広信用金庫のカレンダー原画等のために制作された『扇ヶ原』と『広尾海岸』があります。

本展出品作のうち、『風景』と『農場』は、地平線の位置を中ほどよりやや上にとり、一点透視図法で描かれています。ベニヤ板に描かれた大作群に比べると、モチーフも構図も伝統的な画法に沿ったものです。そして、画面における視点は、地面近くから見あげるような角度で、近景に農道



風景 1969年



農場 1970年

や農地、中景に牧場やサイロ、遠景に周辺の山々が広がっています。初夏の十勝のさわやかな空気感と空と大地の広大さが感じられ、小品ながら日勝の確かな描写力がうかがえます。

山塊—熊代弘法油彩展

七月十九日〜二十四日
鹿追町民ホール

鹿追出身で帯広市在住の画家、熊代弘法氏による個展。九十五年の同会場での造形作品展に続き、今回は「山」をテーマとする鹿追では二回目の油彩画展。六十九年の「旅」など初期の作品から、二〇〇二年の「桜島」など近作に至る二十点が出品されました。作品は山肌の険しさや山の量塊感を感じさせ、来場者の目を引いていました。



萬鉄五郎記念美術館所蔵作品展

五月一日〜十二日…鹿追町民ホール

神田日勝記念館友の会創立十周年記念事業

本展は、岩手県在住の橋場あや氏が「少年に見せたい絵」として収集し、萬鉄五郎記念美術館に「シバ・コレクション」として寄贈した中から五



十一点を運び、展示しました。菅井汲の「シグナルE」や利根山光人の「ザッキンのゴツホ像」、船越保武の「少女」など、版画や彫刻による優れた作品群の構成は、多くの来場者の目を楽しませました。

刷り師 木村希八の仕事展

八月十二日〜十九日…鹿追町民ホール
神田日勝記念館友の会創立十周年記念事業

鎌倉市在住の木村希八氏は、石版画の刷り師としては国内でも草分け的存在で、一九五九年に版画工房を設立以来、二百人を超える画家と組んで二千五百点もの版画を刷りあげました。本展は、その刷り師の仕事に焦点を当て、六十九点の作品を展示しました。

池田満寿夫の「マヌカン」や岡本太郎の「石と樹」、草間彌生の「水玉の集積」などから、片岡珠子の「芦ノ湖の富士」加山又造の「熱帯魚」など、現代美術から日本画に及ぶ日本の代表的な作家のリトグラフと銅版画が一堂に会しました。

来館者は、それぞれの作家の個性と、それを一流の技術で版画作品として完成させる刷り師の技に注目していました。



第八回 蕪壑祭

六月十七日(月)
神田日勝記念館・鹿追町民ホール

開館日を記念する「蕪壑祭」。本年は芽室町の「やまなみ合唱団」を招き、プッチーニの「グロリアミサ」や武満徹の「さくら」などを展示室で演奏しました。会場は約五十人余の聴衆で埋まりました。その後の町民ホールでの交流会では、主催者・来賓の挨拶に続き、テーブルスピーチをささみ、合唱団による「夏の思い出」や「里の秋」のアンコール演奏で締めくくりました。交流会は、「新出紀久雄と水彩画家の仲間達展」のオープニングも兼ねて行われ、茨城より来町した新出氏と二十八人の門下生は、ワインとチーズと手作り料理とともに、終始なごやかな雰囲気を楽しんでいました。



新出紀久雄と水彩画家の仲間達展

六月十七日〜二十三日 鹿追町民ホール
神田日勝記念館友の会創立十周年記念事業

小樽出身で、国際的に活躍する画家新出紀久雄氏（茨城県在住）と、その門下生三十人の水彩画百一点を展示。新出氏の緻密で迫力のある表現

「波濤」（複製）を始め、門下生の、主にヨーロッパや日本各地の風物を旅情豊かに描いたものなど、いずれも透明水彩の色を重ねによる深みが感じられる作品が出品されました。「新出展」は、鹿追で過去二回開催されています。

第十回 馬耕忌 八月二十四日(土)

鹿追町民ホール

神田日勝の命日にちなみ、その画業と生涯を顕彰する「馬耕忌」が、十回を数えました。

本年は、ゲストにNHKラジオセンターの青木裕子チーフアナウンサーを迎え、青木氏による日勝の著述文の朗読、武田耕次氏の司会で、小樽山博館長と青木氏との対談が行われました。帯広出身のギタリスト田中光俊氏による、朗読のBGMを始めとするギター演奏も彩りを添えました。

日勝が生前書き残した随筆や寄稿文などが、朗読によって、生き生きとよみがえり、四十人余の聴衆は熱心に聞き入っていました。

対談では、神田日勝の人間としての面白さや奥深さ、魅力を語り合いました。まず、青木氏は「神田日勝は不思議な人。朗読を繰り返す度



に、新たな日勝に触れられる。」と朗読後の感想を語り、館長は「彼の文章は意識的に抑えていて、それが絵に向かう。日常の中で抑えている部分がマグマのように溜まり、無意識に表現に出てくる。八歳までの東京での戦時体験が彼の無意識を支配しており、北海道に生まれ育った人間には描けないと思う。」と聞き手の感想を語りました。

作品の第一印象について、青木氏は「日勝の絵を、去年の秋初めて見て、強烈な印象を受けた。絵なのに重くのしかかってくる。大地の強さを感じる。」と語り、日勝が農業者であり、表現者であったことに対し「日勝の生き方のエネルギーに魅かれる。」と述べ、館長は、日勝の生涯について「彼の無意識の中に、死に対するものや崩壊していく予感があったにちがいない。日勝は描ききって死んでいる。」と結びました。

ACT5展

八月二十四日〜三十日 鹿追町民ホール
神田日勝記念館友の会創立十周年記念事業

全道展会員五人（木村富秋、福井路可、森弘志、矢元政行、輪島進一）による、札幌、伊達に続く鹿追での巡回展。

「ACTは英語で、行動する、活動するなど、能動的で積極的な意味なので、その言葉の意味を、この会の名称に込めた」と、木村氏は語っています。出品作品は、それぞれ個性を強く感じさせ、来場者を魅了していました。



寄稿文

リアリスト神田日勝

栃内 忠 男

絵画における画面の雰囲気のようなものや絵の味わい、それに抒情性とか詩的口マンといったもので支えられている絵がある。

このような絵とは異なる神田日勝の絵画には、現代風の生と死をみつめる宗教感もない。日勝の絵は、真正面から自然と向き合った緊張感の中から生まれた現代の写実絵画である。自然そのままの形ではなく、眼に見えない奥の深いところに潜む眞実を掴み取るとうまく変型が行なわれ、その形は抱きかかえられるように力強い。大地に鍼を入れるような筆致によって、物体面を抱え、その質感と重量感、日勝のリアリズムである。年少の頃から《ゴミ箱》《飯場の風景》《人》《牛》といったオンブル（茶系）調の、自立した傑作がある。

第十六回全道展の会場で、異彩を放つ《飯場の風景》を観ていた一人のアメリカの軍人が足早に私に近寄ってきた。「あの絵を描いた人、居りますか。」と、絵を指差した。一瞬、何事かと思つたら「とても、すばらしい。」と、絶賛の一言を残し、



栃内 忠 男

1923年札幌市に生まれる。'46年全道展創立展招待出品。'55年会員。'43年独立展初入選。'59年独立賞。'64年会員。'69年第2回北海道美術展で道立美術館賞。'86年「北海道の美術'86展」で道立近代美術館賞。'93年札幌芸術の森美術館で「栃内忠男展」。'97年北海道文化賞。

軍人は姿を消した。このように日勝の絵には強い感動を与えるものがある。日本人の誰かに告げたかつたのであろう。

絵画することは、二から九までのプロセスであり、日勝は大きな変貌をみせた。自らの情熱から浮き出たイメージは、発想も手法も月並みな常套から脱け出たどんでんがえしをやった。表現主義的な《人》と《牛》は、チューブから絞り出したばかりの柔らかい絵の具を画面に叩き込んでいく。が、これも見事なものだった。神田日勝とは、二、三度会っている。

日勝が全道展の審査に出席するようになってからのことである。程よく日焼けした笑顔で会釈を交わした。若さが漲って、発刺としていた。日勝は、自画像も描いているので、イメージが重なり強い印象になっているのかも知れない。

日勝家ででの昼食

霜 村 英 靖

九月の晴れた日、デメーテルの会場を訪れた。閑散としている。三年前、混雑する人々の中を見て歩いたヴェネチアピエンナーレと何と違うことか。入口でレンタルの自転車借り、広い会場を見て回る。まずは、キャリアケースのパビリオンに入って寝ころび隙間から青空を見上げる、厩舎を回って干し草の上の小さな馬の置物や、暗闇の中に写し出された馬の影をぼんやりと見つめる。外に出て、今度は厩舎の板壁の隙間から中を覗く。金色に輝く馬の骨がモビールのように風に揺れている。疲れたので川俣正の「不在の競馬場」で木馬に乗って遊ぶ。

十八番厩舎若井成昭の「雪のウポポ」の会場に入る。真つ暗だ。目が慣れるとぼんやりと奥が明るい。雪について語る声が流れてくる。馬の匂いがする。暗闇の中で多くの人が日勝の冬を語る声を聞くうちに、ふと三十数年前、神田日勝宅を訪れた日のことが脳裏に蘇った。あれは彼が亡くなる一、二年前の冬だった。荒土会の会長をしていた渡辺禎祥氏に誘われ、地元紙に荒土会展の批評などを載せていた太田修教氏と私の三人で鹿追へ向かった。「日勝氏の生活は楽しいかないから迷惑をかけぬよう弁当持参で」という禎祥氏の言葉で、我々は握り飯持参で彼の家を訪れたのだ。暖かく迎え入れてくれた彼の家の板の間の居間で、ストーブを囲みいろいろ話をしたが、詳細はもう忘れていた。ただ、居間に接したア

トリエから、彼が「これだけが私の唯一の財産です」と言い乍らベニヤのパネルに描いた作品を次々と出して見せてくれたことだけは、今も鮮明に記憶に焼きついている。社交家の禎祥氏と話上手な修教氏に会話をまかせ、黙って彼の作品を見ているうちに昼時になった。我々三人は日勝氏に勧められるままに、結局持参の弁当には手をつけず神田家で昼食を御馳走になった。その時の献立はご飯と長芋の酢の物、長芋をすった薯蕷で白一色だったことが、強く印象に残っている。そんなことを思い出しながら暗い厩舎を出て、天空にある筈の蔡国强の UFO が地上に横たわっているのを眺める。白い。日勝家の薯蕷の色だ。若い頃から重要なモチーフとして馬をとり上げ、「瘦せ馬」や「死馬」そして、絶筆も「未完の馬」だった神田日勝が、この競馬場を会場にしたイベントを見たら、どんな感慨を抱くであろうかなどと彼に想いを巡らせながら、馬の匂いに包まれたデメーテルの会場を後にしたのだ。



霜 村 英 靖

1937年生まれ。荒土会会員。

馬の絵写生会

7月26日（金）鹿追町ライディングパーク

馬の絵作品展の関連事業として、日頃馬に触れる機会の少ない小学生に、実際に馬に親んでもらい、作品を製作することをねらいとして実施しています。

参加した小学生12名は、脇坂裕氏の指導を受け、熱心に製作に取り組みました。馬に草を食べさせたり、馬の身体に触れたり、体験乗馬等を通して体感した馬を、思い思いに描きました。また、地元の小学校の教諭が、指導に役立てたいと見学参加しました。



第8回 馬の絵作品展

募集期間 7月1日（月）～9月10日（火）

展览会 10月16日（水）～21日（月）

表彰式 10月19日（土）

会場 鹿追町民ホール

鹿追町で馬とともに生き、馬の絵を数多く描いた神田日勝。その画家の志と、十勝の開拓の歴史に馬の果たした役割を現代に伝えることを趣旨として、小中学生を対象に馬の絵作品展を開催します。

本年は8回目を迎え、応募総数も1,696点と、昨年を200点余も上回りました。鹿追町を含む十勝管内の225点を始め、道内から1,124点、道外から347点、その中には夏休みを利用して帰国したベルギーからの1点もあり、審査の結果、入賞13点、入選45点、佳作51点が選出されました。

文部科学大臣賞の、函館市立の場中学校2年田中智穂さん他13名が入選しました。本年は、道外と町内の応募が増え、学年別では小学校3年の出品が2倍以上に増えました。また、優秀な作品を数多く出品した羽幌中学校と標茶中学校に、審査委員特別賞（学校賞）が贈呈されます。



神田日勝記念館長賞

- 文部科学大臣賞
- 北海道知事賞
- 北海道教育委員会教育長賞
- 鹿追町長賞
- 鹿追町教育委員会教育長賞
- 神田日勝記念館長賞
- 北海道新聞社賞
- 日本放送協会帯広放送局長賞
- 十勝造形サークル委員長賞
- 帯広市教育研究会工芸美術部会長賞
- J R北海道社長賞
- 北海道電力帯広支店長賞
- 帯広信用金庫理事長賞
- 審査委員特別賞（学校賞）

- 函館市立の場中学校 2年 田中 智穂
- 釧路市立湖畔小学校 3年 土山 俊樹
- 芽室町立芽室小学校 4年 荻原 初夏
- 羽幌町立羽幌中学校 3年 長内香菜子
- 登別市立幌別小学校 6年 国崎 翠
- 士幌町立新田小学校 1年 関根 瑛穂
- 釧路町立富原中学校 1年 上野 樹
- 釧路市立愛国小学校 4年 高橋 憲人
- 菊間町立菊間小学校(愛媛県) 5年 高橋 良多
- 鹿追町立瓜幕小学校 2年 石澤 徹
- 小樽市立潮見台小学校 6年 梅田 彩花
- 札幌市立澄川南小学校 2年 萬ヤマユリ
- 倶知安町立東陵中学校 3年 加藤 達也
- 羽幌町立羽幌中学校
- 標茶町立標茶中学校



文部科学大臣賞



北海道知事賞

新販売物のお知らせ

神田日勝記念館では、平成14年7月より、窪島誠一郎著『北国願望』（領価1,850円）と、神田日勝の作品『自画像』をデザインした一筆箋（領価400円）を記念館受付（窓口）にて販売致します。『北国願望』-わが愛する美神たち-は、窪島氏が北海道の画家への熱い想いをエピソードを交え語ったエッセー集です。その中で神田日勝について、「鋏と絵筆-神田日勝の鹿追」と題して、前年「美術と文学の出会い」で小檜山博氏との対談のため鹿追を訪れた際のエピソード、日勝の絵に対する見方や想いなどを語っています。

